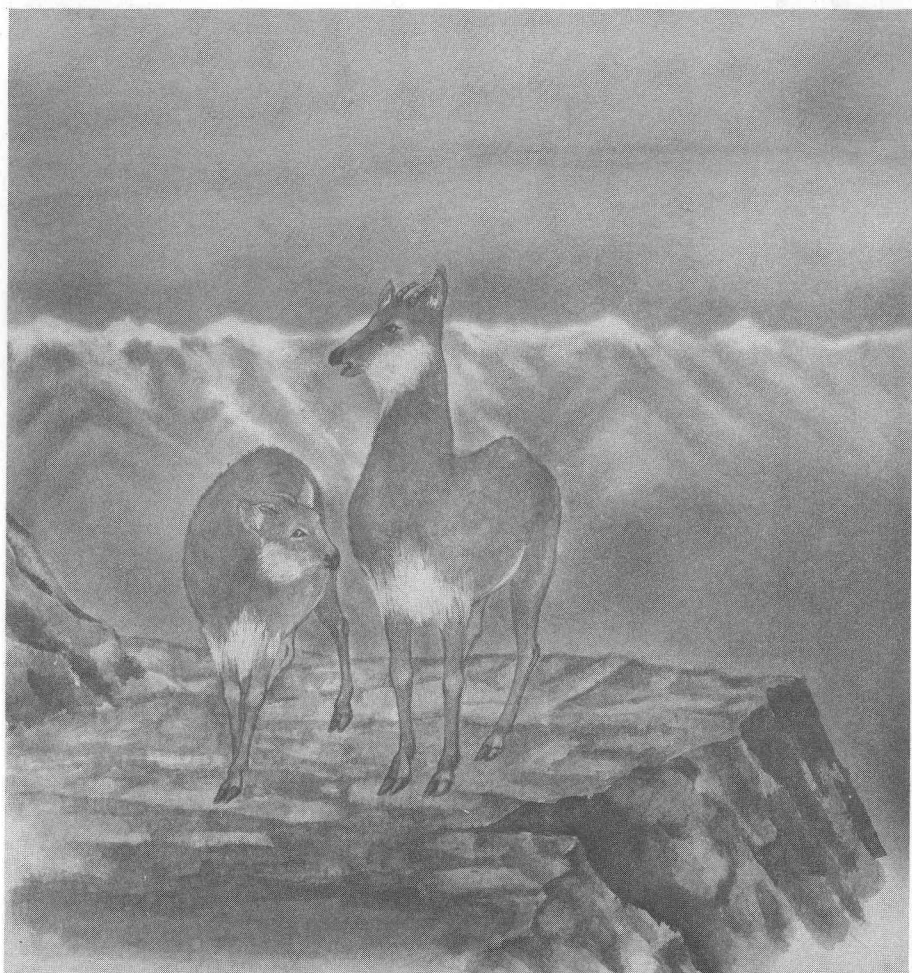


季刊 連句 第32号

平成三年三月一日発行



現代連句とは何か(南柏雑記 30)	1
コロンブスの卵	鈴木春山洞 2
「鳶の羽も」の巻鑑賞(最終回)	東 明 雅 4

第三十六回 猫 蓑 会	7
-------------------	---

歌仙七卷
 捌 東 明雅 穴沢篤子 大窪瑞枝 坂本孝子
 下鉢清子 副島久美子 福井隆秀

「蓑虫」付勝練習二十韻	14
-------------------	----

沙 羅 の 会	16
---------------	----

歌仙四卷
 捌 八角 澄子 文 坂本 孝子
 捌 瀧川 雅代 文 米谷 貞子
 捌 下坂 元子 文 雑賀 遊
 捌 若尾よしえ 文 式田 和子

「電腦連句」のことども	林 義 雄 24
義仲寺正式俳諧小記	小林しげと 26
電通連句部 捌 東 明雅	27
赤山連句会 捌 秋元正江	27
湘南連句会 捌 式田和子	27
柏 連 句 会 捌 瀧川雅代 梅田利子 五十嵐譲介	28
雁帛往来	29

現代連句とは何か

南 柏 雜 記 30

雅

現代連句を説く前に、まず、連句とはどんな特徴をもつ文学形式なのかを考えてみよう。5・7・5の長句と7・7の短句を、交互に何句か続け一巻とするだけなら、明治時代の新体詩と変わるところはないではないか。

連句は座の文学で、そこに連句の特質を求め人もある。しかし、中には座を組まないで、ひとりで一巻を完成する独吟という形式もある。独吟だって連句たることには差支えないとすれば、座の文学たることだけが連句の本質でないことは明らかであろう。

さらには、連句は挨拶・滑稽が必要である。これが連句の文芸性であるという説がある。しかし、芭蕉の作品にも挨拶のない巻は多く、滑稽のない巻は無数である。

それならば、連句を連句たらしめるものは何か。A・B・Cと句をつらねた場合、AとB、BとCとは、それぞれに何かの点で付いていることが必要なのである。AとB、BとCは、俳句でいう二物衝撃の関係になり、付け合わされることによって、AでもBでもない新しいイメージを生じなければならぬ。BとCとの関係も同様である。これを仮りに付けの理念と言おう。

さらに大切なことは、A・B・Cが並べられた時、Aと

Cとは同じ事、同じ物、同じ表現など、とにかく同じもの、似たようなものであることを極力忌み嫌う。これを転じの理念と言う。

連句とはこの付けと転じとで、展開して行くもので、これこそが、日本人が発明した独自の文芸のメカニズムなのである。

連句と言われるものはすべて、この付けと転じのメカニズムによって成り立っているもので、この付けと転じこそが連句の生命である。これがないものは形は似ていても、決して連句とは呼べないであろう。

それ故によい連句を作るにはその付心をはっきりして、付味がよいことが必要であり、また、転じを考えるためには、決して打越に返らぬように、歌仙ならば三十六歩先へ先へと進むべきであろう。このためには輪廻にならぬよう式目を守るべきであり、付味無視、式目無視の連句などは、連句ではなくて、新体詩のできそこないである。

一月十五日、現代連句シンポジウムが行なわれ、パネラーならびにゲストから、いろいろ新しい説を拝聴したが、連句をいかに新しくするかという点にのみ、重点がおかれ、つい、連句とは何かということをお忘れの方が多かったように拝見した。いくら現代連句といっても連句の本質を離れては無意味であろう。

一言苦言を呈する次第である。

コロンプスの卵

鈴木春山洞

古来、城塞の構築に従事したものは斬殺されるのが恒例であった。歴史も常に、これを抹殺して来た。オーバーな表現と思われるかも知れませんが、今や、国民文化祭・連句大会の表も裏も知り悉くした鈴木春山洞のような存在は、連句界にとって目障りな存在でしかないらしい。癪にさわって仕方のない存在であるらしい。東明雅先生は第5回国民文化祭・愛媛90・文芸大会・連句大会について書くよ、御徳憑下さるが春山洞自身はもう国民文化祭を忘れることに努めています。そっとして置いて下さいませんか。

○国民文化祭は毎年開催されるお祭りだよ。松山大会の過大評価は避けよう。あの程度の大会は、君、毎年繰り返し開催されるよ。俳句会に較べてみたまえ、九牛の一毛だよ。

○国民文化祭は毎年開催されると定まっているお祭じゃあないか。そんなもの大したものじゃあないよ。今度は何処かな。あっそうか、千葉千葉。

○連句協会々報もニュースに飢えてるんだね。手放しじゃあないか。あんな四国の、ド田舎でやったことを大

仰に取り上げてサ、見苦しいよ。

○お祭さわぎじゃあないか。どたばたを、これから毎年繰り返されるんじゃあ、かなわんなあ。変なもの始めてくれたな。連句だけは、こういうものに超然とした存在だと思っていたのに……。

○君、今世紀最大規模の連句大会なんて、言ってくれるじゃないか。あんなもの、すぐ破れるよ。記録は破られるためにあるってことを忘れるなよ。大きな面するなってことよ。

○毎年全国何処かで繰返し開催されているお祭さわぎじゃあないか。それも四国の松山なんて田舎のグサイコとが、中央で通用すると思っているの。思いつがるのも、いいかげんにしたまえ。

○予算の全てを役人に握られた官製の猿芝居。どたばた連句大会。魅力ないよ。町民文学の雄「連句」を役人に屈服させるなんて、とんでもないこと、やってくれたな。残念だよ。見そこなっちゃったよ。男のやることじゃあないよ。連句人の面ヲ汚し。

○入選作品集って、あれ、なんだい。審査員（選者）が

自分の結社・派閥の作品を選ぶことに努力し、ずらりと並んだ大賞（九賞）の中に、審査員が五人も受賞者で並んで圧巻だったなあ。

○そうそう、審査委員長として審査講評する予定だった先生が、受賞者に廻ってしまったので、現地事務局はあわてて審査講評者を頼みまわったんだって。△そんなことはしません。全て連句協会本部にお願いして居りました。▽

○連句大会入選作品は、連句会の伝統を破り、そこなうものである。「和」をたっとぶ連句の世界に、大賞を導入することは、結社間の競争意識を助長するものである。連句に大賞は不要である。

○連句大会入選作品集は、審査員（選者）中心主義を貫いた等と言って得意がって居るが、とんでもないことである。審査は公開されないことを原則とするのが、連句界の伝統であった。良き伝統は保持されねばならない。

○今回の連句大会入選作品集のあり方は、審査員（選者）のあり方そのものを一般的立場から逆に審査させるといふ、とんでもない結果を生みだし、審査員（選者）の存在・権威を著しく傷付け、連句の「和」を尊ぶ精神にもとり、連句の伝統を破ったものである。

○連句作品の審査にあたって、大宗匠の持ち点が群小審査員の持ち点と同列に置かれたのは判らない。

○審査に当って何故、特選10点・優秀5点・佳作1点と

定められたのか。特選は739点。優秀は123点。佳作1点であるべきではないか。

○審査員の選び方がおかしい。県外17名・県内3名の比率は、どのようにして定めたのか。

○審査員の選び方がおかしい。本人の内諾もなく審査員にして置いて、後から承諾書を集めるやり方は納得出来ない。

○連句大会入選作品集と称しながら、何故「佳作」入選作品を特選・優秀と同等に扱わないのか。

○皇太子殿下行啓の名を借り連句界の伝統を破り、連句実作会を早朝実施して、日本全国の連句人に大迷惑を掛けたことを、どんなに反省しているか。

○皇太子殿下の行啓は受けるべきではなかった。「連句」は何処までも庶民の文学としての孤高性が尊重されるべきだったのだ。

○国民文化祭・参加料無料を謳いながら、何故、連句前夜祭だけ有料にしたのか。他の三部門（俳句・川柳・短歌）の前夜祭は、松山市主催で参加料無料だったと言うではないか。

○国民文化祭・参加料無料は結構だが、実作会中に茶菓の接待もなかったのは残念である。茶菓が欲しいと言うのではない。皇太子殿下行啓とか小役人の指図に振りまわされて、連句界の佳き伝統を破って欲しくなかった。人間的温かみに欠けた大会であったことを知っているか。

国民文化祭は「連句」を普及させる最良の方法であると信じている。第1回から第4回までの苦渋と焦燥は、コンブスの卵が立ったことよって解消した。愛媛で新規分野の「連句」は、千葉で実績分野・石川で継続分野になり、岩手・三重と国民文化祭正式事業として永久に開催実施される事だろう。伊賀貞雪愛媛県知事は、鈴木春山洞を名指

「鳶の羽も」の巻 鑑賞 (最終回)

東 明 雅

35

たゝらの雲のまだ赤き空

一構鞦ひとくまづきつくる窓のはな

(春。はな。人情他)

凡兆

(現代語訳) 踏鞦たまたづきの煙が赤々と立ちこめている辺りに、鞦とづきを作る一部落があり、その一軒の家の窓辺に桜の花が咲いている。

(付心) 起情の句。其場の付。踏鞦たまたづきは必ず人里はなれた所にあり、その近くにある革細工人を付けたもの。

(付味) たゝらと鞦とづきは位の付。

(転じ) 庶民の生活、それも下層の社会の気分は変化していないけれども、「窓のはな」で、やはり明るい気分が加わっている。

して感謝状を贈り「第5回国民文化祭・愛媛90の開催に当たりその趣旨を御理解のうえ祭典の成功のため多大な御協力をいただき文化の向上に寄与されましたのでここに深く感謝の意を表します。平成二年十月二十八日」と。以って瞑すべきか。

4

36

(補説) 鞦は馬具の名称。馬の尾のつけ根から鞍橋になく帯緒。また、馬の頭・胸・尾に掛けるひもの總称とも言う。馬具は皮革製品であるから、それを作る人々は、多くは村外れに一かたまりで住んでいた。これが「一構」である。

「窓のはな」はもちろん、桜の花であるが、「家のはな」あるいは「庭のはな」でないところに、窓近く見えている人物の存在を暗示し、かつ、親しみやすく、明かるい気分になっている。

一構鞦つくる窓のはな

枇杷の古葉に木芽このめもえたつ

史邦

（春。木芽。人情無）

（現代語訳）鞆を作る一部落の窓辺に花が咲き、枇杷の古葉の間からは、目のさめるような新芽がふいている。

（付心）遁句。其場の付。

（付味）枇杷の古葉と鞆を作る家業とは位。もえたつ木の芽は、花の豊麗さにうつりあい、ともに巧みな照応を見せている。

（転じ）打越が人情無なのに、この句も人情無である。その点、前句をはさんで、景は変化しているけれども、全体の気分としてはあまり転じていない。

（補説）「木の芽」は当時、初春（正月）の季語として用いられた。この句の場合、特に「木芽もえたつ」として用いるのは、前句が晩春であるために、「枇杷の新芽が相当伸びて、古葉との色の対照が目立つようになった季節」を言いたかったのであろう。

以上で「鳶の羽も」の巻の鑑賞を終わったが、全体についてももう一度振り返って見たい。

この「鳶の羽も」の巻は、元禄三年（一六九〇）冬の作品で、「木の下に」の巻（「ひさご」から、約半歳ほどの作品である。芭蕉はこの元禄三年四月から七月まで、国分山の幻住庵にひとり静かな生活を送って、新しい作風を作り出す工夫をしたと言われるが、「ひさご」と読みくらべてみると、いろいろな点に相違が見られる。

まず、表六句は、初時雨に濡れ、樹上に蕭々たる姿の鳶

と、木の葉のはらはらと散ったあとと静寂を描き、それが股引を朝から濡らし川を渡る生活、狸の罟と庶民の生活相に移りさらに月の定座には山里の閑寂な住居とそこに住む主人の狷介な人柄を紹介するなど、変化はなめらかであり、それぞれに人生・自然の奥深いところを描いている。「ひさご」の表六句にくらべ、一段としっかりとした味が感ぜられる。

裏十二句は墨絵を書きなぐる隠逸・高踏の気分が始まり、自足・平穩の気分から修験者が登場してやや俗の世界に入ったかと思うと、芙蓉の花、水前寺海苔が出て、さらに唐の茶人盧同の下男など、花の句も穏かな花が付ければ、折端には「ひとり直し今朝の腹だち」とおかしみが入っている。この十二句には總じて脱俗・高逸の世界がさまざまに描かれ、一見、単調のようにも見えるけれども、芭蕉が苦心して完成した余情付（句・響・うつり・位などの付）と、転じにおける自他場の別とが完璧な姿で示され、たとえば

芙蓉のはのはらくとちる

史邦

吸物は先出来されしすいぜんじ

芭蕉

三里あまりの道かゝえける

去來

この春も盧同が男居なりにて

史邦

さし木つきたる月の朧夜

凡兆

など、微妙な転じのおもしろさ、複雑で豊かな付味を十分味わうべきところである。いわゆる猿蓑調の代表的付合と言ってよいであろう。

名残の表十二句は、折立から、何かただならぬものを感じ

じるが、それが冬の孤島苦となり、さらに一転して釈教の句から、時鳥によせた季節感の表白となるが、次の五句目「瘦骨の……」の句から、折端の前にいたる五・六句は一句ごとにとがらりと状景が変わり、それがそれぞれにのっぴきならぬ場面をとらえ、人情句の連続するいわゆる逆茂木となり、芭蕉・去来・凡兆・史邦の四人がそれぞれの全力をこめた応待は、まさに劍客同士の真劍勝負を見ているような緊張感があり、この盛り上がりは見事である。一卷のヤマ場はここにあり、この「蒿の羽も」の巻が傑作として推賞されるのも、このところの迫力・魅力によるものであろう。さらに、

せはしげに櫛でかしらをかきちらし

おもひ切たる死ぐる見よ

青天に有明月の朝ぼらけ

湖水の秋の比良のはつ霜

右一連の転じの鮮かさはどうであろう。芭蕉たち作者にとっても快心の作だったに違いない。

名残の裏六句、この六句も穏やかな中に変化があり、最後までおもしろさが持続している。蕎麦を盗まれる風流歌人から庶民の旅の苦勞、そしてたゞらの雲という珍しいものから轍を作る一部落の花と変化して、枇杷の新芽の青々とした句で、めでたく一卷が満尾した。

この一卷、表六句は序・破・急の序にあたり、穏かで、裏十二句は破の一段として、ややおもしろく、名残の裏十二句は破の二段として、いろいろな物が出て盛り上がり、

名残の裏六句はまた穏かに、急の段としておさめている。一卷の展開申し分ない。

この巻の特色を左に列挙する。

① 隠逸・自適の世界の樹立

この巻を流れるのは隠逸・自適の気分である。庶民のさまざまな生熊も描かれてはいるが、それも世俗に徹したものはなく、人物も目立つのは高踏の徒、脱俗の風流人である。

② あはれ・わび・をかしの渾融・調和

物のあはれ（優雅の世界）

わび・さび（心敬的な艶・枯淡の世界）

をかし（飄逸な風狂の世界）

この三つが、作品の中で偉大な調和を示している。

③ 古典の摂取・面影付の進歩

火ともしに暮れば登る峯の寺

押合て寝ては又立つかりまくら

右のような句は去来によって面影付とされている。けれども、その人物を的確に指摘できぬほど隠微なものである。これは付け方としては進歩である。また、「源氏物語」などからも取材されている。

④ 余情付の完成と自他場意識の確立

余情付（句付とも言われる）としての句・響・うつり・位などが完成された姿で示され、前句との付味が非常によくなったとともに、人情の有無、自他の意識の存在がはっきり指摘され、一卷の変化に留意されている。

第三十六回 猫 蓑 会

歌仙七卷 参加者四十七名

平成三年一月十六日
於 深川芭蕉記念館

初 懷 紙

東 明 雅 捌

初懷紙矢立初めのゆかりの碑

淑氣満ちつつ寄する川波

厩出し門田の道を整へて

菲難炊をことごと煮る

大掃除済みし家族を覗く月

子供部屋に灯徹夜勉強

赤鼻の少し色褪せ天狗面

お爛しますか冷にしますか

まづあげる暑中見舞のキス長し

睨つぶれば火の海の中

回教の聖地戦の砂嵐

屍狙ふ禿鷹の群

天心に月あり影と語らひて

秋薔薇きりて飾る食卓

ひよんの笛向き合ひて吹く眼の笑ふ

郵便配達猫を撫でゆく

飛行船のつと浮びし花の上

ボートレースのひびく掛け声

明 雅

あかり

しげと

遊

富 美

夫

と

遊

り

美

夫

雅

と

遊

美

同

遊

夫

春障子明けてひろげるお針箱
軸に書きたる薄墨の「夢」

にゆるにゆると轆轤の壺の立ち上り

親爺の好きな義士焼の湯気

アノラック脱げば意外な優男

逆玉に乗る甲斐性もなし

皇太子妃候補のしぼられて

伊勢の二見も日帰りの旅

月の友年金手帳たしかむる

虫歯の痛む暈冷やか

新豆腐ひらひらと手に桶の中

日本人よりうまい日本語

富士垢離のあと残りたる白き肌

マスト林立ヨットハーバー

貝殻にかそけくひそむ汐の音

陶器の犬を愛る少年

花やさし浄瑠璃寺の人やさし

朝寝の窓にゆらぐカーテン

遊

り

遊

と

り

夫

と

遊

と

り

美

遊

り

遊

り

同

雅

夫

日は海に

穴澤篤子捌

日は海にかへるや御行仏の座

月太りゆく初風の嶋

父と子の団扇作りを励みゐて

囁り聞きつ煙草くゆらす

剪刀の羊群れゆく山の裾

今朝受けとりしバイク新型

デザイナー修業トウキョウニューヨーク

誰に似てゐる伊達な口髭

「愛される理由」を読んで愛されず

湾岸危機に一喜一憂

ぼうふらの濁れる水に浮き沈み

熱き珈琲またすすめられ

高階にひとり占めして望の月

衣桁にかかる重陽の衣

威銃研返しのはるかにも

小犬を連れて歩く公園

町長選終れば花の便り来て

音楽教師春風邪の午後

篤子

正江

みづゑ

淳子

達子

健悟

志げ子

悟

淳

志

淳

ゑ

達

ゑ

同

淳

悟

同

捨雛引越センターもめてをり

相続税などわたし知らない

顴骨に頑固印の長寿眉

自慢話を立つきっかけに

九十九折峽深くして雪もよひ

謎が謎呼ぶ壬申の乱

あひみてのちのころに罪重く

離婚三婚フォーカスの種

ぴかぴかに鍋を磨くの別れるの

熟れし苔桃卓にそのまま

棟上げの扇車に月明り

西鶴忌とて池の鯉賞で

ヴァッカスを名乗りて酒を買ひにゆき

帰れぬ故郷思ふ民族

砂に文字書いて子供に伝へたる

日曜ごとのマラソンに出て

花万葉大音声に晴れわたり

東風ひるがへす旅人の袖

江

淳

達

志

江

同

志

淳

ゑ

悟

志

ゑ

達

淳

江

ゑ

篤

達

初懷紙

大窪瑞枝捌

初懷紙墨東芭蕉記念館

結び柳に映ゆる床の間

干鏢熱き茶漬をふるまひて

春のスキーの支度する子等

臘月梢のあやめも分かりかね

猫うづくまる裏の原っぱ

おしらさま又新しき布重ね

手紙やさしく文字も言葉も

噴水に火照りをさます彼のキス

夕焼け空にビルの林立

戦争か平和か今日が正念場

出番遅しと黒幕のかげ

遊眠社渡り台詞もめくるめく

フェイクの毛皮なめらかな月

手作りのティラミスちよつとこつがあり

いつも素敵な僕の叔父さん

花の下記念写真に皆笑ひ

菜畑低く蝶々飛び交ふ

利杉澄芙貞瑞

亭利澄貞同利亭貞亭澄紗貞子亭子紗子枝

永き日のいろはに並ぶ謡本

胡座をかいてふくむ吟醸

物言ふも逢ふも懶し冬深く

寒雷荒るる真夜ほしいまま

かうなれば歳の違ひがなんでせう

獣かくせる人の虜に

細密画インドの女神指そらし

三光鳥のはいはいと啼く

「晩年」を晩年に読む桜桃忌

さつと洗って卓の灰皿

宿直のひとり月見る測候所

稜線齧るる高西風の後

爽やかにモーツァルトを合奏し

寸胴鍋に煮込むすね肉

原稿の榊こつこつと埋めをりぬ

待ちに待ったる鮎の巢離れ

花万朶湖北の汀縁取りて

ロードサイクル陽炎のなか

澄瑞亭貞同澄利紗同貞同澄貞紗澄紗亭貞

小正月

坂本孝子捌

一灯に祈る平和や小正月

あづき粥煮る厨辺の妻

宿場町崖のかたかご咲き初めて

間近に仰ぐ残雪の峰

有明の囀り耳に溢れつつ

大極拳の人集ひ来る

ちらし撒きファーストフード開店す

郵便受にお目当ての文

しのび逢ふ恋とかくれて吸ふ煙草

加茂の祭の牛はのろのろ

拍子よく鯉の骨切るやとひ婆

生死は年の順にあらざり

月明の池に翳する松の濃く

モダンアートの多き二科展

不器用な芸やや寒く三枚目

送り太鼓にそぞろ歩める

花尋めて吉野の旅の歌日記

雨もあがりて麗かな午后

孝子

春山洞

治子

ますみ

和子

路子

雅代

同

路

治

和

み

洞

和

代

洞

み

和

籬ナの客ジーンパンきつく座りたり

グラビアめくるパーマ屋の椅子

仏とも神ともつかず新宗教

苦勞の仕上げ私限りで

人前で笑ってかげでまむし酒

胸のほくろを知ってるる奴

枯草の岸に子が待つ廓舟

もがり笛とも叫び声とも

物差しがあれば鍬がまたみえず

つもっては捨て困む麻雀

雲はらひ今中天に望の月

蔵ナの荒壁蚯蚓鳴きぬて

鉄色の袴低めに風炉名残

左ハンドルちよつと自慢に

テクノロジー追ひつき難くマイペース

鯉ゆるやかにおよぐ庭園

選ばれて皇居に上る花の頃

頬杖をつく春の夕暮

路孝治路代和み治代和代孝路代路和路み

都 鳥

下 鉢 清 子 捌

ふんはりと都鳥浮く隅田川

日脚伸びたる橋の欄干

アトリエの筆架に筆を揃へゐて

ちよっと一服紫煙くゆらす

蝗捕りめつきりふえた有機農

夜なべ続きの団地自治会

梵鐘に三五の月の響きあり

食気旺盛恋はまだまだ

この頃のもてる若者しようゆ顔

創刊雑誌出るたびに買ふ

キヤスターになりたていつもつつ走る

夏嶺を望む単線の駅

焼酎で囲む車座また軍歌

猫抱き上げて階段を降り

幼児を連れたるひとが神を説き

とりこみ中ですどうぞ隣へ

月出づる気配はらみて花爛漫

人影ゆらと春の障子に

清子

弘子

元子

郁子

哲子

藍子

哲子

郁子

利子

哲子

弘子

元子

哲子

藍子

弘子

清子

藍子

元子

亀鳴くと畦道のどこ曲らうか

信号黄色アクセルを踏む

迷彩服四十万が砂の国

羊の皮の苞に煙突

夕凍みの何であの娘がかく愛し

なまはげの鬼初嫁を追ひ

同病の慰められて慰めて

使ひこなせぬ文明の利器

さりげなく新人OLAシ

弁当箱の焼いたおにぎり

裂織の機踏み仰ぐ軒の月

数珠玉振れば乾く音する

そぞろ寒唯野教授を気どる奴

工場建ちぬし故郷の瀉

おもかげの魚釣る父の肩うすき

エープリル・フルおこごとの夢

花の歌あまたひととき花に寝む

雨後の籬に陽炎のたつ

弘 清 利 哲 郁 藍 弘 元 清 哲 同 郁 利 藍 利 元 哲 郁

鼓 打 つ

副 島 久 美 子 捌

鼓打つ音澄みゆけり寒稽古

早梅の香の満つる床の間

波寄する浜の公園散歩して

餌付鷗にパン屑をまく

昼の月閉ぢたるままの文庫本

秋の袷の直し頼まれ

ロザリオ祭尼となりにし姉のあり

山の窯場で修業する彼

求婚をすれど通じぬ美濃訛

飲めもせぬ酒飲んで乱れる

調停はデッドロックに乗り上げて

振子時計がボンボンと

建具師の道具蔵へば月涼し

へば将棋打つ路地の縁台

迷ひ犬鑑札の字の読みにくき

フリーターいま流行る世の中

咲き重る花の下枝を揺らす風

遠足の児の歌ひつつ行く

久美子

千 町

良 子

淑 子

ふ み

好 敏

町 敏

良 敏

淑 敏

町 敏

良 敏

同 敏

敏 敏

み 敏

淑 敏

敏 敏

町 敏

み 敏

見上げればのどかに浮ぶ飛行船

寄進瓦に名前書き入れ

舌だけは抜かないでよと詐欺名人

草魚ゆらりと夢を見る池

ストープに笛吹きケトルけたたまし

惚れられてゐるくしゃみ三回

金で釣る身の毛もよだつ狒狒親父

由緒正しき貧乏の出で

ブロードウェイ梯子して観るミュージカル

高層ビルに月の影濃く

むざんやな足落したるきりぎりす

口伝秘伝の薬掘る畑

染め抜きの暖簾をかかげ客を待つ

高校マラソン応援の旗

乃木さんの銅像洗ふボラソスティア

白和へにして土筆鉢盛り

花万朶古来稀なる吾が齡

やうやう暮るる春の虹消え

淑 町

敏 町

敏 町

淑 町

み 淑

淑 敏

良 淑

良 敏

良 敏

町 敏

淑 敏

良 敏

み 敏

み 敏

敏 敏

久 敏

敏 敏

敏 敏

あたらしき

福井隆秀捌

あたらしき世紀に十年淑氣満つ

松の声聞き巻く初懐紙

重箱に蕨餅詰め手土産に

掃立てすみし故郷の家

朧なる深山の上に昇る月

猫の名前を選ぶあれこれ

絵付する少女美しデルフトの

嘘と知りつつ街角に待ち

剃りあとの青々としてそこが好き

やっぱり当るおみくじの札

夏場所の潮騒のごとどよめきて

テレビに映る次官長官

月まろしワープロ終へてポストまで

東寺の塔にまとふ秋冷

鶉鳴く野末にひとつ誰の墓

歩かう会の旗掲げゐる

花見酒マイク離さぬ喉白慢

大の字なりに春の眠りを

隆 啓 麻 照 一 冬 欣

秀 世 子 代 二 乃 恵 二 乃 恵 二 乃 恵 二 乃 恵 二 乃 恵

新蚤ホの思はぬ時に跳び出して

ブッシュ・フセイン・タイムリミット

紙おむつなかなかとれぬおしゃまっ子

童話の本を全部読まされ

トナカイの群れの鈴音雪の果

寒の鼻に向ひ旅する

おいでやすお休みどすかお泊りか

ほくろの数を知りつくす仲

ワ印は奥の土蔵に隠されて

織部の茶碗備前長船

月の蝕宇宙の神の面白や

ことしは鯊サの釣れる岸壁

病弱の母へ千振り引いてやり

電話するなら夜の晩くに

ファジイてふ言葉流行るがファジイにて

鳥雲に入る書斎窓越し

全社員記念写真に花万朶

友と肩組み夢の弥生路

代 秀 子 乃 世 乃 二 恵 二 乃 恵 二 乃 恵 二 乃 恵 二 乃 恵

蓑虫

付勝練習二十韻

東 明雅

授句締切
4月20日

蓑虫の音を聞に来よ艸の庵

初めて涼し掛けし濡縁

海岸線波頭真白に月ありて

飛ぶやうに行くホバークラフト

心太芥子きかせてすすり込み

制服脱いだ彼とくつろぐ

さりげなくお守りだよと犬はりこ

回教国は酒も御法度

バザールに水煙草吸ふ男たち

すこし疲れて美術館出る

見上ぐれば摩耶のあたりに雪しまく

客待つ暖炉あかあかと燃え

据ゑ膳は食はぬと言った嘘もばれ

電算三課セクハラの畏

十五句目

治定 ゴミ袋つづく不気味な鳥たち

1 屋上にボール打ち合ふバレエの輪

2 弁護士を追ひかけまわす週刊誌

3 アカシアの花の香りにけむる月

4 子猪ゆゑ危険忘れて人里へ

芭蕉

正雄

千遊

淳子

よしえ

元子

和久

良久

良子

正雄

鋭太郎

達子

志げ子

藍

妙子

治子

千雪

美幸

均

※えは納得できる。ただ、打越、前句が何となくもやもやとした気分の方だったから、もすこしすっきりした月だったら効果的だったろう。4 畏から子猪が出たのであろうが、全く動物の句にしてしまうと何か前句への付味が悪いのではないか。その点は7などは人とも動物とも取れる語で捌いているのは老巧である。5これは1とやや似た場面を取り上げている。「スクラムのがっちり組まれ」という所がこの句の味噌であろう。6脱サラ・Uターンの人の心境であらうか。これも一つの付け方であらう。8これも夏の句であるが、付心がやや曖昧である。9これは同じ夏の句でも、付心ははっきりし過ぎるほどだし、また、新しい事物を取り上げている。転じも十分で、この句を治定してもよいと思つた。10黄鶯も夏の季語だが、付味がやや離れすぎではないか。11前二三句が室内の景であるのに、戸外の景を出して変化をはかったのであろうが、やはりやや離れすぎていようだ。12占ひ師はセクハラにうまく付いているが、満月だけでは秋の句になり、絶対に悪いとは言えないけれども、月が二つとも秋の長句では変化に欠けはしまいか。これは18も同じことが言えよう。13は熱帯魚で夏。これは電算三課の室内の様子、おそらくそこで残業している窓に月が出ているのだらう。付味が微妙で、転じも利いている。この点は20も同様で、残業の窓から眺めた景色であるが、黒い富士がなにか重くらしい気分を引きずっているようである。14・15はともに夏の月で、それぞれに変わった句である。ただ、14・15ともに八体という時節の付け

- 5 スクラムのがっちり組まれ競技場 雅代
 6 故郷に無言で語る田畑あり 利子
 7 ふと迷ひ出でしはけもの通る道 鋭太郎
 8 青梅のほろりと落ちて夕ぐるる 波奈子
 9 夏の月新都庁舎の屹立す 悟朗
 10 黄鵠のそれきり啼かず織き月 えい
 11 遠きより寄する街騒歩道橋 恭子
 12 満月のピルの谷間の占ひ師 琢也
 13 熱帯魚ひらひら泳ぐ窓の月 美鈴
 14 テレビ塔ゆがみ溽暑の月出づる
 15 人玉のような月出て土用風
 16 コンピューター部屋のどこかに虻蝸ないて
 17 一斉に胸に火ともる赤い羽根
 18 満月のかかる双塔新庁舎
 19 夜毎来る石焼薯屋の鳴らす笛
 20 残業やとつぷり昏れて黒い富士
 21 蛸蜒も居れば蠅虎も居り

1 お昼休みに屋上でバレーに興じている姿はまことに和やかであるが、その実はセクハラの罠であるという。複雑怪奇な女性の世界をさりげなく描いたところがよい。ただ、打越から全く離れたと言いくいのではないかと思われる。2 セクハラに弁護士・週刊誌は近すぎるのではないか。近いから絶対に悪いというわけではないが、打越からの転じも不十分である。3 このあたりで夏の月を出すという考※

であろうが、何かやはり打越からのもやもやとした気分を転じて得ていないのではなからうか。16これは電算三課にベタ付けで、其場の付けである。ただ虻蝸なくは秋の季語であるから、この句を採用すると、月は二句とも秋の月、二十韻の中に秋の句が六句出ることを覚悟しなくてはならない。17十月の一日になると、一斉に赤い羽根を付けて出勤する。外面は赤い愛の羽根を付けているが、そこはセクハラの罠であるとは、おもしろいが、これも秋の句である。19オフイス街も夜が更けると、石焼薯のおじさんがやって来る。昔はリアカーだったが、このごろは軽トラックを改装したものを使っていろいろだ。夏・冬は二句去りで十二句目の暖炉からは二句へだたっているから、式目では障りはないけれど、やはり、冬が近すぎるようだ。21蛸蜒のような人、蠅虎のような人、人の世はそれぞれ男もいろいろ、女もいろいろである。おもしろい句であるが、この巻の発句に糞虫が出ている。一卷に虫を二度出していないという法はないのだが、やはり発句に対しては敬意を払う方がよいのではなからうか。治定の句、豊かな時代のマイナス面として、公害、ことにゴミ公害は最大の課題であろう。銀座の朝、群がってゴミ袋を漁る烏たちの不気味な姿は、一つの象徴であり、時事問題でもある。前句との微妙な付味を味わって欲しい。打越の気分をさらに深刻にしている。次は夏の月位出していたきたい。人情なら自、人情無しでもかまわないが、続いたうっとうしい気分を払いのけていたきたいと思う。

沙羅の会

歌仙四卷

平成二年十一月七日
於 俳句文学館

冬立ちぬ

八角澄子 捌

雑感 坂本孝子

酒買ふて弾むころや冬立ちぬ

澄子

春寒き洞には鬼女の棲むといふ

孝

A C C連句教室で伝導の書を受けられた

眠りに入りし四方の山なみ

正雄

拍子確かに舞ひ納めたる

正

方々も十期生となり、この度の沙羅の会の

歌留多とり青き畳の匂ふらむ

孝子

出社せずゆるりと過す即位の日

孝

四席の捌は、この十期生であった。平素教

電話の奥で母の挨拶

利子

菜をさはむA・クリステイ

達

室での実作は二十韻が主であり、当席の捌

半月を道づれにしてひとり旅

淑子

オリエント急行列車は特等で

淑

八角澄子さんは歌仙の捌は初めての由。お

木造駅舎コスモスのゆれ

達子

甘やかされて遊ぶ若妻

澄

まけに今回は興行の準備万端も十期生が受

この頃は猪出でて畑荒らし

利

昼逢ひし人の訃報を夕時雨

孝

持って下さったのである。唯でさえ当番は

すこうしばかり悪が好きなの

淑

声くぐもりて啼ける白鳥

達

会場の設営、茶菓、酒、弁当の手配、会費

恋文の秘めしところは横文字で

孝

新体探繩に棍棒・りぼん・毬

淑

の徴集等、労力と気遣いが大変であるのに、

教師稼業も板につきをり

正

おかつば・すきつぶ小さきほしえっと

達

捌ともなれば起句も考えねばならず、又籤

かみ殺す欠伸の数もとみにふえ

淑

三夜見ねば驚くばかり月育つ

孝

引でどんな連衆が加わるかも心配で、御心

頬を叩けば逃ぐる蚊っ蚊

孝

書道一筋文化勲章

正

中察するに余りあるのであった。

湖をあまねく照らし夏の月

正

秋深し馬と言ふ名の多き土佐

利

起句

千日回峰かしづくも行

孝

銀鱗跳ねて湧きし舟端

淑

酒買ふて弾むころや冬立ちぬ 澄子

コーランの流るるモスク人あふれ

淑

クラス会腕白時代さながらに

正

これは当に捌の実感溢れる句である。それ

ドルのレート弱ぶくみなり

孝

チャイムが鳴れば眠るカナリア

達

に付けた脇句

のし袋帯にはさみて花衣

達

石垣になだるる如し花万朶

澄

眠りに入りし四方の山なみ 正雄

目刺食ふのが長生きのこつ

同

熱気球にて震越えゆく

淑

は「立冬」に対し「眠りに入る山」で時節

的にはびびりたりであろうが、「弾むころ」と「眠りに入る」ではちよつとそぐわない様な気がする。第三以下五句目迄は転じ、付味大変よいと思うが、六句目以降「木造駅舎」「猪」と、やや脇句の「四方の山なみ」に戻るのではないだろうか。ところが八句すこしばかり悪が好きなの 淑子このずばりと切れ味のよい転じで面白い恋の展開がもたらされた。

9・10・11の三句はやや転じが鈍り、停滞したが、13

湖をあまねく照らし夏の月

正雄

と大景の場の句に転じ、しかも前句の「藪つ蚊ともよく付いており、流石ベテランだ」と思った。14句目の「千日回峰」は、前句を琵琶湖と見なしたものである。これに対し15の

コーランの流るるモスク人あふれ 淑子

は、宗教のすり付けと言う事になるうか。

よく分らないが変った付け方だと思ふ。

しかし、15・16・17・18・は花の句を挟んで軽く明るくよい運びである。

名残の折立、愈々破の二段に入り「鬼女」というまがましいものを出してみた。これに対し20句目

拍子確かに舞ひ納めたる

正雄

前句の鬼女を能舞台に見立てたものであろう。もともと鬼女などと言うものは現実世界に存在しない(居るかも知れないのに……)という考え方に立てばこのような付け方もよいのかも知れないが、明雅先生の御教えに従えば、「この世の中の森羅万象何でも、それは芝居の中、舞台の上の出来事と考えてしまつては、連句としての発想は乏しくなつてしまふ」のだそうで、右の句がそれに当るかどうか先生に伺つて見度いと思ふ。21から29までは付味・転じもよく変化もあり、大成功。恋の句も裏の軽い悪戯っぽい雰囲気とは異り、無常の句も入つてしつとりと深みのある恋となつたと思ふ。22・23・24・25・26で大きな山場となつた。又27・28の拍子立も一卷に一ヶ所この様な場面のあるのは楽しい。

ナウ折立

秋深し馬と言う名の多き土佐

利子

「秋深し」の季語が効いていて力強く折立に相応しい。そして32・33と手応え確かな付が続き、花から挙句まで見事に巻き納められている。序破急の呼吸も結構だと思ふ。歌仙の初捌も立派であつたが、十期生の

皆様の発想の楽しさに大いに魅力を感じたのであつた。

最後に作品の内容とは直接関係ないが気の付いた事を二、三付記したい。

一、連句興行の時は準備係と捌とは兼ねない方がよいと思ふ。

一、一座した連衆の出句数に大きく差の出来そうな時「Aさんの句をBさんに下さいね」と言つて句はそのまま、作者の名前だけ変えて付ける事がある。しかしこれはあくまでも窮余の策であり、まだ一卷の前半にも達しないうちや、一直すれば付く句があるような場合は避ける可きだと思ふ。又付いた句の数よりも、たとえ一句でも自分で案じた句が前句にびたつと付いた時の感動の方がはるかに大きいものではないだらうか。

一、沙羅の会のように一応全員が伝導の書を頂いた様な水準の人達で構成する会では、公平感を保つ為、先生をはじめ、全員の俳席を籤引で決める事が望ましいと思ふ。

以上気の付くままの羅列にて、的外れの所あらば御寛容下さい。

石路咲くや

瀧川雅代 捌

味わい深い一巻 米谷貞子

石路咲くやむかし大名下屋敷

雅代

残る虫鳴く枝折戸の影

啓世

ひとり子拳玉あそびすぐ飽きて

貞子

手作りクッキー味は上々

久美子

パソコンのソフト差しかへ昼の月

瑞枝

初潮の沖浮ぶ帆船

同

町挙げて金比羅祭賑はへり

久

千社札貼る背ナのいなせに

貞

走り書き「ロビーで待つわき」と来て」

世

彩の妖しく移るオパール

貞

少しづつ人質解放はじまりぬ

久

時刻表見つ腕時計見つ

貞

照る月にとどろきわたり那智の滝

世

野外演奏ロックバンドで

久

表芸あつての隠し芸なりき

貞

左の方もちよっとたしなみ

久

しば厚き利久ねずみを花衣

枝

小宮にしまふ対の豆籬

同

あしたばのてんぷらと和へ物鮎脛

世

銭勘定はいつもお任せ

貞

溢れ出る企業アイディア若社長

久

果てなく続く崑崙の道

同

古代から木乃伊は秘むる謎の笑み

枝

愛のもだえに虎落笛きく

久

ものうげに紅ひきなおす枕元

貞

主義者たりしを父は語らず

枝

ベレー帽友と連れだち交叉点

貞

カフェテラスにてエスプレッソを

世

しゃっくりのまじなひ効かず月仰ぐ

久

帰燕ひらりと越ゆる山の端

世

賞品を盛りだくさんに運動会

久

ビデオカメラを構へそはそは

代

美容院着付お安く致します

枝

うしろ姿に犬が尾を振り

久

たなびきて菩薩をつつむ花霞

貞

耕し了へてたたずめる畦

世

石路の花がひっそりと暖かい冬の陽をよめて
つめているおだやかな日であった。沙羅の
会の「秋」の席のお捌きは十期生の瀧川雅
代様、まず御用意の四五句の中から発句を
互選、

石路咲くやむかし大名下屋敷

丈高い立句ぶりにこの句を頂く事になった。

会場の俳句文学館の辺りは、むかし江戸城
の西を固める意味もあり、親藩の下屋敷や

旗本衆の家々で埋められ「江戸御府内地図」
に、一橋家、小笠原家の下屋敷の置かれた

所に、いつぞやすぐ近くのホテルでの
集りに、その庭に由緒ありげな風情があっ

た事も思い出され頷かれるのであった。

さて脇の句は発句の格にびたりと付き、

残る虫もゆかしく、第三は転じて気分もす

っかり現代の子供の世界である。拳玉とい

ふ懐しい玩具も、最近また復活したようだ

が、まだまだ今の子には退屈な遊びなのか

も知れない。四、五句目とも新らしく面白

い月である。六句目で海に出て気分一転、

表六句は穏やかなうちにも変化もあり大變結構だと思ふ。

裏に入って七句目は初潮、帆船によく付いた神祇の句である。八、は恋の呼び出し、九、の口語体の若々しいときめきは、オパールの彩が、おぼめきつつ揺れ動くさまでもあろうか、はつきりしないと云えば、丁度イラクの人質が小出しにぼつぼつ開放されかけた時でもあった。十二、は思うにまかせぬ焦躁の其の場の付と見るのも一つの見方である。

夏の月は場面かわって那智の滝の轟音、ロックは文字通りのひびきの付であるう。

十六、左の方もちょっとたしなみ

ロックバンドと隠し芸とこの句、同一人物の廣れなしとせず、左の方もものがちょっと気になり、先生よりかねがねお教え頂いた筈の、根を切れ、続きを云うな、のお言葉のむずかしさを思うのであった。

十七、しば厚き利久ねずみの花衣

まことに優雅な枝折の花、付句により全く違ったイメージを楽しむことの出来るのもこの句の持つ巾、谷崎描く「芦刈」のお遊様を偲ばせる人のあでやかな酔いざま、片や豆籬の思ひ出を語り聞かせながら孫と

のやさしいひとときの若いおばあちゃま。次の句の御馳走も嬉しく、つい「銭勘定

はいつもおまかせ」となってしまうのであった。

二十一、新進気鋭の若社長の夢は溢れる如く、二十二、の果てなき崑崙の道ときっぱり場の句になっているのはお捌きの適格な校合であった。思ひはいつか崑崙より西域へ。

木乃伊は謎の笑みを秘めて解けることなく、次の二句は名残の表の恋、裏の恋句はずんだ若い人の、そして今度は許されない思いに心乱るる恋、けだるさ秘めしきぬぎぬの枕元、夜通しきもがり笛のせつなき。

二十六、主義者たりしを父は語らず

原句は虜囚たりしを、十一に人質があり折りも変り、離れてもいるが、共にとらわれ人、一直され霧囲気一変、ちがった面白さ、往年の闘士も今はすっかり丸くなり、これから向く足は画廊か劇場へでも、ベレー帽も板について、二十八、こちらはカフェテラスで気どってエスプレッソを飲んでいた人、突然のしゃっくりに親ゆずりのお呪いも効を奏せず、こうじ果てて見上げた空にお月様。

山の端を燕の帰る頃であった。

名残の裏は市井の風景、運動会には賞品の山、さて品物はなに？ ところで近頃の親ごさん達、我が子の為なら形振、人の迷惑おかまいなしの大奮闘、これも世相のひとつなのかも、こちらは美容院で美しく装った奥様には犬までもがお愛想、でもうしろ姿というところが面白く。匂いの花は霞に包まれた秋篠の菩薩を佛に、耕し終えたやすらぎの人に明るくかろやかに挙句。

三つの月の句はそれぞれ趣向を異にして違った味わいがあり、二つの花の句も又然り、楽しんで読み通すことが出来た。

しかし振り返って全体として眺めた時、序破急の流れにそった落着いた巻ながら、たって慾を申し上げれば、小さな山はあるものの、もう一暴れの所があれば一層の盛り上りを持つ事が出来たであろうと思われし、さび、しをり、をそなえた巻というもの是如何に難かしい事であるかという事をしみじみ感じた事であった。

自分の拙ない句のまじってる歌仙の感想など、誠に厚かましく面はゆいかりであった。でも雅代様がしっかりと釣目をお取りになり、真剣な校合に初稿とは変り随分味わい深い一巻となったこと、当日の楽しさと共に連衆のひとりとして嬉しく有難い事であった。

石路咲くや

下坂元子 捌

堂に入った捌 雑賀 遊

秋の沙羅の会は、今回初めて俳句文学館で催された。明日は立冬と云うのに、汗ばむような暖かさ。

会場は、お当番の「八の会」の方達に依って整えられ、四つの卓にはお花も飾られている。入口で千代紙の籤を引くと、「春」と出た。床の間の前の「春」の席には、既に明雅先生が、にこやかにお着きになっていらっしやる。先生と御一緒のお席とは、緊張し乍ら末席に侍らせて頂く。

捌は元子さん。連衆は先生の他に、正江さん、みづゑさん、弘子さん、そして遊。

四季々々の席に会員が揃い、定刻開始。

元子さんの丈高い発句が示された。早速みづゑさんが綿虫の脇をおつけになる。第三は正江さんで、日本画家の趣。こうして石路咲くやの巻は、上品にしらずと滑り出した。遊の向付の第四に、先生が民宿の句をおつけになり、これでガラリと情景が変る。まさに転じのお手本である。弘子さんの威銃が鳴ったところで表六句が終り、乾

石路咲くや光集めしひとところ 元子

籬を透きて飛べる綿虫 みづゑ

襖絵を展べひろげたるままにゐて 正江

お茶召しませと捧げくる盆 遊

奥山のかかる民宿後の月 明雅

こだまを返し威銃鳴り 弘子

スカーフはピエールカルダン秋遍路 雅

銀座のことはおしょうばいな の 江

胸薄く唇厚き妓との縁 遊

なるやうにしかならぬこの頃 弘

恐ろしいヴィールス侵入コンピュータ 遊

左遷と知らず受ける盃 同

どんどこと天満天神夏祭 雅

学者先生すててこの月 江

猫・猫座犬は犬座を守り 弘

籠の鸚鵡の鮮やかな色 遊

花びらに手をかざしては園児達 弘

にしん曇の北ぐに住む 江

春炬燵残るは爺と婆ばかり 雅

並べ干したる鍔の大小 弘

珈琲はエスプレッソでシュガーレス 江

ゴルフマージャン競馬競艇 雅

ねずみもち黒き実垂れて御師の家 遊

ぬらりひょん出る蕪村忌の宵 雅

愁ひつつおもきおろどの抱きごころ 江

昔の君はあどけなかりし 弘

ナンバーワンセールスウーマン颯爽と 遊

サウンドブレイクビルの谷間に 弘

月代にさざめき立ちし海の面 遊

きりたんぼ喰ふ夢の故郷 雅

にぎり酒母の加減の味よくて 江

即位の礼にそなふ人々 弘

つくづく「大愛幽情」額の四字 雅

稚魚解りしか瞳こらしぬ 遊

輪唱の声の楽しき花の昼 元

風に乗りゆくバラモンの風 弘

杯。高い気温と、先生のお傍での緊張に、咽喉もからからの状態で、お酒が特別においしい。お弁当を上げる方もある中、裏へ。秋通路が、カルダンのスカーフをしている、という意表をついた先生の折立。ここで人名が出た。正江さんがなまめかしい銀座の女の恋をつけられ、それを受けた遊のすりつけの句を、弘子さんが軽く離れた。みづゑさんがOA機器をお出しになり、同じく世相の句を続けられた後、左遷の先が大坂と判る天神祭の先生のお句。すかさず正江さんが、大阪風俗すててこの月を投込み、座がわつと湧く。おっさんならぬ学者先生のスうててこに、一同しげしげと先生のお顔に注目。「正江さん、どこで先生のすててこを御覧になったのオ。」と、虚実混同した遊の愚問に、正江さんもドギマギ。座が弾んだまま、とんとんと花の句へ。弘子さんの愛らしい子供の花。折端は、正江さんが、北の国へと舞台を変えられた。さて、ここまでの元子さんの捌だが、おつとりと、にっこりと、退けるものは敵と退け、決して妥協なさらず、優しく促がし、おだやかに誘い出し、見事な手綱捌きでいらっしやる。明雅、正江両先生にも怯えず、

三先輩にも怖じず、とても沙羅の会での捌はお初めてとは思えない御立派さである。悠々と名残の裏に入つての先生の折立は、春炬燵のお年寄。次にみづゑさんの、よくひびく向付で、外に鏝の干してある情景。一寸古めかしくなつた処を、正江さんが珈琲の句で気分一新。ゴルフマジシャン競馬競艇、と先生が軽くお続けになる。賭事好きのいる、暗い家のイメージで付けた遊の、ねずみもちの句に、先生が「ぬらりひょん出る蕪村忌の宵」とひよいとおつけになった。余りにもびったりの付味に、あつと驚いていると、正江さんが凄いのをお出しになった。蕪村の「愁ひつつ丘にのぼれば花茂」と「ゆく春や重たき琵琶の抱きごころ」を踏まえての句「愁ひつつおもきおるどの抱きごころ」だ。この俳諧味溢れる滑稽な恋の句に一同拍手喝采。暫く笑つた後、大きくて重たい南瓜のようなお尻の持主も、昔はあどけなかつた、と弘子さんが受け、次二句はビル街に変わり、二九から都会を離れ、ナオの月は静かな海に出て故郷は秋田。先生の夢の句がつく。名残の裏に入り、正江さんの母の句が出た。前の夢の句と共に、ところを得た述懐

の句だ。ついでみづゑさんが、御即位の時事の句を出された。会場の日本間の長押しは、東洋城の「大愛幽情」の額が掲げられてあつたが、それを巧みにとり入れられた先生の花前。元子さんの花の句は、明るく楽しい輪唱の句。そして弘子さんの、珍しいバラモンの罫の挙句で、目出度く満尾した。この巻の前半のヤマは、一二、一三、一四。左遷の先の天神祭、それに学者先生のすててこ、と伝うユーモラスな俳諧味。名残の表のヤマは二三、二四、二五、の流れと、諧謔味溢れる恋の句。御師の家、蕪村忌、重いおるど、の滑り心地、滑稽さ。どちらのヤマも、明雅先生、正江さんのコンビに依る快挙で、さすがアと唸つてしまつた。それにしても、元子さんの、堂に入った捌ぶりには、感じ入つた。はっきりした序破急。付味と転じの良さ。内と外の転換。ころころ珠が転びながらも、軽すぎず、さりとて重すぎず、新人と思えない手練に操られ、連衆は楽しく時を過ぎて頂いたのであつた。因みに、この日一番早く巻き上つたのは「春」の座だつた。

草 紅 葉

若尾よしえ 捌

昨日今日色さし初めて草紅葉

よしえ

小鳥の網にかかる昼月

和子

採れたての川苔を炊き食卓に

麻子

新聞を持ち息子帰宅す

あかり

イーゼルの絵を後からとみかうみ

淳子

カットグラスの影と光と

同

くゆらせる紫煙たゆたひ戻り梅雨

和

つぶやく女を乗する助手席

好敏

ソバージュの髪をまさぐる太き指

り

カードで払ふほどの恋なり

和

伝説を深く秘めたる古き池

敏

臘八太鼓晝に打たるる

和

凍て月に張り込み刑事背まるめ

淳

血液型を秘書はしらない

敏

イラクより帰る名簿に知人ゐて

り

味噌汁漬物あられ煎餅

淳

量り売り榭にも花の散り込みぬ

敏

とろりとろと春の夢見る

麻

流し雛ためらひ勝ちに放ちけり

犬は犬でも土佐の横綱

降り癖のないひと旅のよき連れに

魚嫌ひが玉に疵なり

松上がり近頃庭師早仕舞

ゲートボールと云って逢引

別々に隠し持つて強精剤

近所姑がうるさくってさ

地下鉄も延びてやうやく箱崎へ

お土産なくてもたす現なま

あどけなくムーンと絵本の月を指す

茶立て虫這ふ壁の腰張

山陰のうっすら寒き家に老い

ベストセラーは欠かさずに読む

留学の時にフルートたしなみし

行きつ戻りつ巣づくりの蜂

お局を偲ぶ入生田花万朵

凧あげ会に揚がる勝鬨

り

敏

和

和

り

麻

淳

敏

麻

り

和

淳

麻

り

麻

え

淳

発句は捌きの方が作られますので、その方の生活体験が読みとれて面白いものです。この「草紅葉」の巻もお住いの辺りの景色を彷彿とさせるものがありました。

第三になりました、山畑のような所から川苔になりましたが、きつとおいしく炊けたでしょうね。

同じ場所に建っている家のような一連の風景ですが、イーゼルが出てよかったと思えました。しかし、食卓の川苔を盛った器は何だったのでしようか。折端にカットグラスが出ますと、花瓶かもしれませんが、やはり食器も連想させますので、良い展開でいるのにーと思えました。

ウラに入って、ウラの(1)折立が、表(4)の画かきさんと面影が似ています。筆者が自分で出してごめんなさい。

ウ(2)に車が出て、ソバージュの髪の女の人の横に乗っている男性が、今流行のアッシー君でない事が「太き指」でよく分りまして、さすが巧者のあかりさん。(4)は次が

一幅の画

式田和子

付け憎い句でして、申訳ない。従って、(5)とのつけ味はまことに神秘的なものとなりました。

ここから、(5)(6)(7)(8)(9)までは、先生のお言葉流にいえ玉が転び、前半の山場となりましょう。捌きさんも気持よく冷定していらっしやっただと思います。

(1)の花では、酒という字を出さずに酒を出してお上手。落語の「花見酒」を連想させます。(2)はほろ酔いで、とろりとろろと春の夢を見られれば極楽で、これも巧者の付けでしょう。

ナオに入り、折立の流し雛は吾子の生長を祈り、一年間の穢れを乗せて流す風習のもの。ためらいがちなのは何か思いが籠っていると読みました。

一転して、(2)ですが黒一点。ガンと横綱の犬を出して、ハッと読者の目を覚ました。しかし、前の句は鳥取の風習。この句は土佐で、地名に地名を付けたわけではありませんが(地名に地名を付けることは私も致しますが)、関連性のない土地が果して付くかどうかは明雅先生にお伺いしてみましよう。(3)、降り癖のないひととは誰方の面影付けか、これはご想像におまかせ

します。(4)で、べた付けでなくさらりと軽く付けられたのはベテランです。

ナオの恋はウラの恋より年齢が高く、その上職業もホワイトカラーでないことがよく分り、芸を細かく、しっかりと違う恋を出された捌様お見事でした。様をつけて敬意を表します。でも、こんなことでは、そりゃあ近所姑もうるさいでしょうね。(8)はきいてます。

人間の息使いの聞えるようなこの流れを地下鉄に乗せて去らせませんが、人間臭さは少々尾を引き「現なま」となりましたね。

ナオ(1)流し雛の止め「けり」。(4)の玉に疵なりの「なり」、両方とも好句でこの止めでないとなまらないでしょうが、「同字「り」が大打越ではあり、けりなり止めは一卷に一つ位がいいかな、など、これは個人の好みです。

(1)で珍らしい可愛いくて近代的な月が出て、ひきずっていたものが切れてよかったですと思いました。

ナウの折立で、寒々とした述懐を出され「しわぶる迄の老を見て」(猿蓑)の翁の境地にいくかと思いましたが、ベストセラーを欠かさず読むハイカラで裕福な老人が

出てよかったよかったです。(3)はその人のあしらいでしょうか。好みの問題ですが、少し説明が過ぎるかもと思いました。

連衆もベストセラーを読んで、お茶でも一服したい気分。捌きの方も疲れの出た気分。そんなことじゃあいかんぜよと、働き蜂が出ましたが、一卷に出すものうち、虫がまだですよ、と虫を出し私などもよく押し込みますが、こういうことは考えなくてはいけないのではないかと思います。むしろこの風景を挙句に持っていて、ここに別の句を入れたほうが展開としてはよかったですかとも思いますし、花の句にもよく付いた挙句となったかもしれませぬ。それは別として、挙句、勝鬨をあげるには競争をしなくてはなりませんから、上七が弱いかもしれませぬ。これも、私個人の好みです。

一卷を捌かれるには、出句傾向多士済々の上級生の連衆にご遠慮もおありだったでしょうし、ご苦労もおありだったでしょう。発句の「昨日今日色さし初めて草紅葉」の中から、色づいた草々を選び分けて一幅の画に仕立てあげられたのはお見事です。益々のご健吟を期待しております。

「電腦連句」のことも

林 義雄

昨夏、私の勤務する専修大学文学部が主催する夏季公開講座で、「電腦連句の楽しみ」と題する講演を行う機会がありました。こういう場合には、自分の専門に関する話をするのが普通なのですが、その頃たまたま、後述するパソコン通信の電子メールを利用した両吟歌仙を同じ通信仲間の杏奈さんと巻いていたということもあって、今回はひとつこれを材料にパソコン通信と連句について話してみようということを考えました。

ところが、いざその講演のタイトルを提出するという段階になって、少し厄介な問題にぶつかりました。と言うのは、この公開講座のPR用に、首都圏を走る電車などに小さな吊り広告を下げることになっているのですが、その演題が長過ぎると印刷文字が小さくて目立たなくなるから演題は八文字程度の短いものにして欲しい、こういう要請が世話係から届きました。

私は初め「パソコン通信による連句の楽

しみ」といったようなタイトルを考えていたのですが、これでは制限字数をはるかに上回ってしまいます。そこで仕方なしにこれこれ考えた末に、ふと思ひ浮んだのが「電腦」という語です。

これは元来中国で「コンピュータ」の訳語として作られたものですが、最近ではわが国でも広く使われており、もはや日本語として定着していると言ってもいいくらいです。で、早速これと「連句」を結び付けて「電腦連句」という四字の熟語を作り上げ、前記のような演題に仕上げたというようにいきさつがあつてこの名称が生まれました。ところで、この「電腦連句」というのはどんなものなのか、それを説明するには、まずパソコン通信について触れなければなりません。そこで、私の所属する日本最大の規模を誇る商用ネットワーク「PCIVAN」を例に引きながら話を進めることにしましょう。

パソコン通信というのは、パソコンあるいは通信機能付きワープロを使って、文章やソフトウェアなどのデータのやりとりを行う仕組みのことです。普通は、ある一つの通信ネットワークを構成する組織の中央

にあるコンピュータ（ホストコンピュータ、以下ホストと略称します）と利用者のコンピュータやワープロを電話回線でつなぐことによって、右のようなデータのやりとりが可能になります。PCIVANのような大規模の商用ネットには、アクセスポイント（AP）と呼ばれる支局が全国の主要都市に設置されており、それぞれがホストに直結されていますから、利用者は必ずしもホストに直接電話しなくとも、自宅近くのAPを経由することで、ホストに電話回線を接続したと同じ結果が得られることになります。これは遠隔の地に住む利用者の電話料負担の軽減に結び付きますから、全国規模のネットワークを形成する上で非常に重要な要素となります。

さて、そのようなAPを経由してホストと電話回線を接続し、一定の手順に従って信号のやりとりを行うと、ホストとの間に情報の通路が形成され、データのやりとりが出来るようになります。

この、ホストの記憶装置には、膨大な情報が蓄積されています。その中には、これを管理する事務局が書込んだものもありますが、それはごく僅かなもので、大部分は

利用者から送られて来たものです。このよう
な、利用者が情報の受け手であると同時に
送り手でもあるという点に、他の情報メ
ディアと大きく異なる、パソコン通信の最
大の特徴があると言つてよいでしょう。

こういう情報は、特定の個人宛てに送ら
れた通信文を除けば、会員であれば誰でも
読むことが出来ますが、その全部に目を通
すことなどは到底不可能と言つてもいいで
しょう。ですから、利用者は初めから自分
の関心のある話題が集まっている場所に直
行してもっぱらそこで読み書きを行うこと
になります。

このようなある特定の事柄に興味を持つ
グループが集まって情報のやりとりをした
り、気楽なおしゃべりの文章を書き込んだ
りする場所を、PCIVANではSIG(シ
グ Special Interest Group)と
呼んでいます。このようなSIGは、PC
IVAN全体を大きな住宅団地に譬えるな
らば、一つの棟に当たります。そして、各
棟がいくつかの階に分れているように、S
IGの内部も幾つかの階に分かれ、さら
んはもっと細かい部屋に相当するところにま
で細分化されている場合もあります。この

ような階や部屋に相当する場所は、ボード
と呼ばれます。

今、我々が全国の会員と一緒に連句を築
しんでいる場所は、「おじさん広場」とい
う棟の九階に設けられてある「連句ひろば」
というボードです。ここは、回文・折句な
どの各種の言語遊戯や、言語に関する意見
あるいは、身辺雑記などが書き込まれる場
所でもありますが、その中心をなすものは
連句です。誰もが気軽に参加できる「自由
連句」、あらかじめ参加する連衆を決めて
付句の作者が前句を捌きながら付け進めて
ゆくという、膝送りによる文音方式を取り
入れた「新歌仙」などの各種の試みの他、
宗匠役を置き、式目に則つて巻く本格の歌
仙も行われています。現在まで、すでに五
回の興行がなされ、目下六巻目が進行しつ
つあるところです。

その運用法ですが、ある歌仙が始まり、
指名された作者の発句がボードに書き込ま
れる。そうすると捌きは適当な時期にそれ
を吟味し、治定の結果をボードに書き込み、
次の出句を促す。連衆は各自の好きな時間
にそれを読んで付句を送信する。一方、捌
きは出句がある分量に達した頃合を見計ら

ってそれを吟味し、その結果をボードに書
き込む。これを繰り返して行うことにより、
やがて歌仙一巻が満尾に至る。ボード上の
連句はおよそこのようにして進められて行
きます。

右のような電脳連句は、誰もがいつでも
参加したり、経過を読んだりする事が出来
ますが、当事者以外に読まれずに両吟や三
吟などを巻きたいというような場合には、
電子メールという機能を使うことも出来ま
す。私はこの電子メールを活用して連句ひ
ろばの仲間の一人である杏奈さんと両吟歌
仙を巻いたのでありますが、それが三省堂出版部
編集者の知るところとなり、昨暮に「電
脳連句で遊ぶ」(三省堂選書)を発刊する
という思わぬ結末を見ることになりました。
また、この歌仙を材料に、冒頭に記した講
座でお話をしたところ、そこに猫蓑会の杉
内徒司さんがご来聴下さり、それがきっか
けとなって、東明雅先生初め関口連句教室
の連衆の方々から親しくご指導を頂く機会
を得るという望外の好運を手にすることが
出来ました。昨年来、電脳連句は、私にと
つて実に予想外の展開を見せてくれた訳で
す。

義仲寺正式俳諧小記

小林しげと

粟津の義仲寺では例年夏には奉扇会、冬には時雨会と二度の祖翁の法要が営まれます。昨冬の二九七回忌は十一月三日でした。

夜来の雨にもかかわらず多数の参会者がありました。この法要ののち同行が集い、無名庵で句会を催すのが仕来りなのですが、こんどは寺院のご好意によりそれに加えて東京慈眼社連句会（三好龍肝主宰）の社中有志が、はじめて朝日堂で法楽の正式俳諧を奉納しました。聞くところによりまずと義仲寺でも落柿舎でもこのような行事は今まででなかったようです。もちろん慈眼社としても初体験でありました。

奉納歌仙の一半は予め前日の午後、無名庵で、残りは旅館におの浜荘で夜分に巻き上げ、それを宗匠が目を通して執筆が懐紙に清書し終えたのは翌未明でした。これは

正式俳諧興行の持ち時間の関係上、止むを得ない下俳諧でした。役割は左の通りです。

正座右より宗匠・三好龍肝、執筆・蛭海、停雲子、脇宗匠・小林しげと、副宗匠・福田真空、飯座左から知司・近藤蕉肝、クリス夫妻、知賓・赤田玖實子、配筆・木戸口てる女、供華・唐木田史子、香元・安江真砂女、座東・船本志紅以上十一名。なお貴賓として岡部長章、浜千代清、富山奏、近松寿子、コー・バン・デン・フーベルの諸雅のご来駕を仰ぎました。

役割、式次第、文台捌き・同返しの手順等は猫蓑会、都心連句会の場合とあまり相異はありません。脇・副宗匠の洋式礼装、また配硯を配筆に、座配を座東に改名し、献花の際、とくに生花の形体を整えるための花鉢はいれないといった程度以外の手直しはありませんでした。配筆といっただけ従来の配硯の仕方に替えて熨斗袋入りのボールペンを配付するくらいであったからです。従って正式俳諧の名に悖ることはなかったと思います。ともあれ時間的制約（およびそ一時間）のなかで作善の文事は緊張しながらも滞りなく、威儀を正して厳修され

ました。次に作品を抄録します。 仏

おもひだす空の機嫌もしくれ月 浪花

感荷玄々浴びる愛日 蕉肝

ストーブに深鍋の蓋音立てて 玖實子

旅の姿にやがて近づく 真空

山頂へ望遠鏡の的しぼり 史子

紙の幟に兜飾られ 真砂女

律宗は瓦の種字も角厳し しげと

（中略）

花吹雪比叡比良から鳩の湖 龍肝

羽で遊ぶはかはひらこ也 執筆

この法薬で、懐紙吟誦のとき正座席が戒壇に背を向けた恰好になったとか、あるいは配筆の方法等について反省会で問題が出ました。改善すべき余地はいくらでもあり、むしろ俳諧の儀式として継承すべき古式・伝統を尊重し、作法の上でこの遺産と現代との調和をいかに図り、受容してゆくかが私たちの課題でこそあれ、当分試行錯誤は繰り返すかもしれない。これが現時点での実感です。大方のご叱正とご理解を賜りたいと存じます。貴重な紙面をご提供いただいた『季刊連句』誌に厚くお礼申し上げます。

◇電通連句部

冬暖か

東 明雅 捌

夕暮や冬暖かき露地の奥
 小雨にけぶる石路の花
 ラケットの糸張り直す暇ありて
 缶詰を開け犬に餌やる
 人質になりたる夫想ふ妻
 〇デーコロンの香りかすかに
 赤富士を見下ろすやうな白き月
 東海地震いつも心配
 リューマチときつきり腰と前立腺
 けふも満員ゲートポールは
^{オオ}到来の大鯛二尾吟醸酒
 熊野詣は命がけなり
 嫂の後姿に惚れ直し
 浅く漬けたる秋なすの味
 湯にひたりつひ歌もでる月もでる
 小金をおろし後の出替り
^{オオ}ステーションワゴンに子供積みこみて
 白鳥帰る湖の青
 夢の世の夢の一時花吹雪
 くるくる廻す春の絵日傘

碧 英子 秀樹 好敏 明雅 樹 同 英 敏 樹 碧
 於 電通南寮
 平成二年十一月十五日

◇赤山連句会

冬の月

秋元正江 捌

書割りのごとし湯島の冬の月
 残る虫鳴く敷石の陰
 ギター弾く仲間次第に集ひ来て
 〇バスデイ・パーティ今ぞたけなは
 糸瓜棚化粧崩れを直しけり
 二科展のあと逢ったあの人
 立待に若僧ひとり庫裡に佇つ
 飛驒の山脈分けて行く水
 勝ち抜いて満杯の酒イッキ呑み
 新宰相がサッチャーを継ぐ
^{オオ}世紀末風男と猫娘
 もう手遅れと医者のおき
 汗の玉見合写真の厚い束
 デートの帰り鯨鍋食ふ
 白鳥は『やまとたける』の化身とや
 副葬品の並ぶ玻璃棚
^{オオ}ゴンドラに老いたる水夫の恙なく
 子供を肩に春闘の群れ
 花衣脱ぎたるままに横坐り
 霞棚引く東の丘

明雅 正江 郁子 孝 操 弘喜 稔 雅 稔 郁 雅 稔 一 喜 稔 雅 郁 孝 江 雅 孝 孝
 於 赤山連句会
 平成二年十二月四日
 於 花ふぶき

◇湘南連句会

落し水

式田和子 捌

やまふところに日と定まり落し水
 ずぶ艶やか淡き昼月
 秋拾尺差しあてて裁つならん
 ファミコンゲーム吾子の上達
 白髭のサンタクロース誰だらう
 暖炉の前に残る移り香
 変り映えせぬ接吻にあきがきて
 オカルト物に回すチャンネル
 大嘗祭街の警備の三交替
 汗を流して配る弁当
^{オオ}蚊を払ひ『鍵や』『玉や』の屋形船
 幕張メッセ犬も新車に
 小肥りで女盛りでしかも後家
 ちよろりちよろりとおつまむ癖あり
 玻璃越しの月光寒く杯を置き
 熟年向きの旅は豪華に
 自嘲の句多き句集を編みしひと
 春の炬燵に彩色の夢
 円覚寺警策響く花の朝
 天に何告ぐ雲雀高々

景翠 和子 泰子 洋子 潤子 泰 洋 潤 洋 泰 潤 洋 泰 潤 洋 潤 洋
 於 湘南連句会
 平成二年十月二十六日 首尾
 於 鎌倉おうめさま

◇ 柏連句会

二十韻 三卷

於 柏市光ヶ丘近隣センター

鶴来る 瀧川雅代 捌

四 温 梅田利子 捌

寒 靄 五十嵐譲介 捌

鶴来るや寧を切に即位の日 雅代

窓開き四温溢るる集ひかな 利子

寒靄の東京をぬけ師の句座へ 雅代

冬あたたかき玉砂利の音 さとる

敷松葉して鳥遊ぶ庭 千町

枇杷ひっそりと咲ける庭前 譲介

綾取りの紅の梯子のつくられて 清子

みはるかす海の蒼さの香るらむ 光子

パロックを奏でるフルート響き来て 譲介

大皿に盛り飽と煎餅 郁子

あと先になり兄と弟 美津

眠りし猫の鬣をひっぱり 八重子

小望月夜学の終る頃となる 正敬

月の出に牧場さり来る牛の鈴 同

なぞなぞをせがむ子を抱き月の縁 代

めくされ市に誘ひ誘はれ 清

葡萄酒倉に愛も醸して 町

秋祭すぐに気の合ふ若者ら 同

「やや寒」と言ひつ触れ合ふ肩と肩 郁

いちぢくのイヴの昔にいざなへる 津

太鼓打つ女はぎの真白き 子

止まり木に寄り甘きカクテル る

見てきた様な嘘を言ふ人 光

及び腰高級料亭覗き込み 子

開拓の歴史をつづるカウボーイ 敬

もうひとつ丸をつければ壺の売れ 町

蝦アレルギー蟹アレルギー 子

宇宙遊泳運まかせなり 清

明日はあしたの風が吹くなり 光

アカシアに中国帽はさまになり 子

うやむやの関越えて来し夏の月 る

ホルダンの川は流れるゆるやかに 津

王家血筋とふれこみの妓女 代

腕白坊主汗疹いっぱい 清

アラーに捧ぐ塔よりの声 町

舌先に媚薬含ませ唇重ね 代

父子二代演ず鬼平犯科帳 敬

ほうたるのひらりと軽く死のことを 津

お不動様のおみくじは凶 子

からしピリリと効きしお叱言^{とと} 郁

月のすだれに映る抱擁 同

凍月に立枯れの幹透ける湖 子

厳肅な事実早やばや岩田帯 る

母の宝は古い糠床 同

酔ひの間に間に募る望郷 子

逆玉の輿的をはづさず 清

山峡に忘れ去られしのぼり窯 町

カラオケできまって唄ふ「ちびまる子」 子

風紋の起伏の果に海の照り 同

税を納めてはっとひと息 津

雪間の草が小指ほど伸び 代

忽ち消ゆる春の淡雪 る

花吹雪夢の国へと迷ひ入り 町

過疎の村花咲き時は夢の村 子

俳諧をあまねく広め花万葉 郁

宅急便で届く若鮎 光

ジョギングの肩よぎる双蝶 子

胡座で会釈交はすのどけさ 敬

平成二年十一月十一日

平成二年十二月九日

連句会案内

＊連句教室

日時 第一日曜日 午後一時～五時
会場 関口芭蕉庵

文京区関口二ノ一ノ三

(電) 三九四一一一四五

＊柏連句会

日時 第二日曜日 午後一時～五時
会場 光ヶ丘近隣センター

(南柏駅よりバス 光ヶ丘団地
マールケット下車)

＊A・C・C連句・理論と実作

日時 第二・四水曜 午後一時～三時
会場 新宿住友ビル四十八階

朝日カルチャーセンター

(電) 三三四四一九四一(代表)

＊猫蓑会(会員制)年四回

(一月・四月・七月・十月 第三水曜日)
会場 江東区芭蕉記念館

江東区常盤一六三

(電) 三六三一一四四八

訂正

前号「鶯の羽も」の巻鑑賞、四頁上段十七行「比良は琵琶湖東岸にある山」は西岸の誤り。

雁帛往来

▽一月六日 関口連句教室、連衆十七名。二席に分け、文人・正江捌。六時すぎ満尾。▽一月九日 A・C・C 式目について話す。ニュートキーヨーで二次会。

▽一月十三日 柏連句会、連衆十四名。三組に分れ、表六句ばかり九巻作る。夜テレビにて、芸術劇場「小林一茶」を見る。

▽一月十四日 式田和子・下鉢清子両氏と柏市の岩田印刷所に行き、「猫蓑作品集I」原稿をわたした。

▽一月十五日 飯田橋グランドホテルにて、「連句新時代はかく発言する」というシンポジウムに出席。

▽一月十六日 深川芭蕉記念館で猫蓑会。出席四十七名。七卓に分かれ歌仙興行。同日、「猫蓑通信第二号」発刊、編集の仏

刈健悟氏に感謝。
▽一月十八日 鎌倉の湘南連句会へ誘われ。会者十八名。三卓に分かれ、歌仙満尾。

車中東京よりの連衆にて二十韻一巻首尾。
▽一月十九日 「南柏雜記」を書く。
▽一月二十三日 A・C・Cにて「付方自他伝」について話す。
▽一月二十四日 電通連句部。
▽一月二十六日 伊勢派正風俳諧の宗匠故橋本石洲氏の遺著「左義長」その他を遺子橋本宣彦氏より贈られる。高い見識と清雅な作風に感激、御生前に面晤を得なかつたのが残念である。

季刊「連句」第三十二号

平成三年三月一日発行

編集人 東 明 雅
発行人

季刊「連句」発行所

▽277 柏市つくしが丘二ノ二ノ二 東方

電話 〇四七二(七五)二一九二

振替口座 東京七二五二二三三

印刷所 株式会社 岩田印刷

▽277 千葉県柏市酒井根六二六一

電話 〇四七二(七四)〇一八三

定価 一部 五〇〇円 送共
一年 二〇〇〇円 送共

連句辞典

東明雅・杉内徒司・大畑健治編

版

B6判

三五二頁

三三五〇〇円

連句の実作・鑑賞・研究に
必須の知識をすべて網羅！
初心者から研究者まで使え
る本邦初の連句辞典

本書は、用語篇、人名篇から成る。用語篇は、現在使われている用語を中心に三二四語を選び、意味・用法の解説をし、「参考」欄の引用文は中・近世の語資料から、用語がどのように記されているかを抄録。人名篇は、近代以降に活用した連句人、俳人五十四人を選び、項目末尾に代表的な連句作品を収録した。また、連句入門の手引き、連句概説、連句略史を付した。近代連句の状況を知る上で貴重なものである。

収録項目例

《用語篇》 挙句 会釈 一座一句 有心 打越

思いなし 表八句 懐紙 歌仙 軽み 切字

景気 五句目 差合 去 式目 四春八木

《人名篇》 天野雨山 伊藤松亭 上田聴秋

鷗沢四丁 小林見外 下平可都三 関為山

高橋玄一郎 高浜虚子 中村俊定 野村牛耳

水原秋桜子編 二三〇〇円
俳句鑑賞辞典

貞徳・宗因から現在活躍中の俳人まで二七〇人の古典のかつ伝統的な名句一〇〇〇を収め、豊かな実作の経験を生かし句作にも役立つ

水原秋桜子編 二八〇〇円
現代俳句鑑賞辞典

結社や傾向にとらわれず現代の代表的な俳人五〇五人の代表作一四六八句を収め、公平に客観的に鑑賞した。俳句鑑賞辞典の重復なし

大後美保編 二八〇〇円
季語辞典

日本の季節によつたる言葉をストック・不快指数などまで収録し、春夏秋冬の四季に分類した。気象学者の立場から厳密に季節を分類

中村俊定監修 四五〇〇円
難解季語辞典

古典俳句に使われる季語は今日では意味や表記が難解で正しい解釈や鑑賞ができない。本書はそれらの季語二千語を収め、解説を施す

国語学大辞典 B5 一九〇〇円
国語学会編

国語慣用句大辞典 A5 六八〇円
白石大二編

国語慣用句辞典 B6 二二〇〇円
白石大二編

国語史辞典 B6 三三〇〇円
林巨樹他編

日本語語源辞典 B6 一八〇〇円
堀井幸以知編

京都語辞典 B6 一八〇〇円
井之口・堀井編

擬音語擬態語辞典 B6 三三〇〇円
天沼 軍編

隠語辞典 B6 二二〇〇円
榎垣 実実編

近世上方語辞典 A5 一五〇〇円
前田 勇編

花柳風俗語辞典 B6 二二〇〇円
藤井 崇哲編

大明治新語俗語辞典 B6 二八〇〇円
榎島忠夫他編

難訓辞典 B5 三三〇〇円
中山 善昌編

名乗辞典 B6 一八〇〇円
荒木良造編

名数数詞辞典 B6 四四〇〇円
森 睦彦編

あいさつ語辞典 B6 二八〇〇円
奥山益朗編

新版 ことば遊び辞典 B6 五八〇〇円
鈴木 紫三編

類語辞典 B6 二八〇〇円
鈴木・広田編

類義語辞典 B6 二二〇〇円
徳川・宮島編

表現類語辞典 B6 四八〇〇円
藤原 一他編

新版 文章表現辞典 B6 二九〇〇円
神島・村松編

東京堂出版

101東京都千代田区神田錦町3-7

電話03-233-3741~2